

## 漢字・漢語の「圧縮力」

やすだ  
安田 登  
(能楽師) のぼる

カフェの隣の席でふたりの女性が話をしている。日本語で話しているのだが、これがまったく理解できない。「セイシキ」だとか、「アイキ」だとか、はたまた「サセイ」だとか「アンポウ」だとか呪文のような言葉を発し続けている。ところがこれらの言葉を聞いただけで、彼女たちがどの業界に所属する人なのか、何の職業の人かすらわかる人もいる。それは彼女たちと同じ語彙を共有する同じ業界の人たちだ。

語彙は、その人が所属する業界や共同体を特徴づけることがある。ちなみに彼女たちは看護職の方たちだった。セイシキは「清拭(体を拭くこと)」であり、アイキは「暖気(げつぷ)」、サセイは「嗔声(しわがれ声)」、アンポウは「罨法(温めたり冷やしたりする治療法)」なのだそうだ。

独特な用語を使うのは看護職の方たちだけではない。「キカンジュンシ」や「バンシヨ」という言葉を聞いて違和感を持たないならば、その人は教育関係者だろう。

多くの職業や団体が独特の用語を持ち、それを身に付けた

ときにその成員として認められるということもよくある。だから、業界に入るとやたらとそういう言葉を使いたがる。「もつと普通の言葉を使えばいいじゃないか」と周りは思う。しかし一度使い始めると、ほかの語ではどうもしっくりこなくなるようなのだ。他の語では伝えたいことは伝えられず、言いたいことは言えなくなる。

業界用語はその人の思考や、感情すらをも規定するようになる。語彙とは、ただの言葉の集まりをいうのではない。

### 豊富な語彙の必要性

業界を特徴づけるような語彙は、漢語もしくはカタカナ語あるいは頭字語(複数の単語からなる合成語の頭文字をつなげた語)が多い。和語でないのは、その業界ができて語彙が定まるとき、新しい概念にぴったりする和語がなかったからだろう。

古代における漢語の受容時も、これと同じような状況だっ

たのではないだろうか。

漢字には「音」だけで「訓」がないものがいくつもある。動詞でいえば、たとえば「感」、たとえば「信」など。「感じる」や「信じる」は、「訓」を宛て得るような概念が古代の日本にはなかったのだろう。そう考えると、「死」という漢字にも訓がないので、日本語の「しぬ」と漢語の「死」にサ変動詞「す」をつけた「死す」が、本来は意味や成り立ちが違っていたことも考えられる。「訓」のない漢字さがしは、高校生たちと一緒に考えると面白いので、ぜひ授業でやってみていただきたい。

また、私たちは中学、高校と国語の授業でさまざまな漢字の熟語を学ぶことで、自分の中にあつたもやもやした感情や思考に形を与えたり、さらには複雑な思考をすることができるようにもなる。問題に直面したときに、自分の中にシンプルな語彙しかない事態を単純化してしまうことになる。

大学卒業後の十年間、公立高校と私立高校で国語科の教諭として勤めた。勤務校の中には、始業の挨拶もできないいわゆる教育困難校もあった。授業は私語の嵐の中ではじまるが、こういう状況を「このクラスはうるさい」と単純化したとたんに解決は不可能になる。

このような問題だけではない。状況を単純化してしまうと、安易な解決策に飛びついて、事態をより悪化させたり、ある

いは「どうしよう、どうしよう」だけが脳裏を無限ループしてしまうなんてことにもなりかねない。語彙を豊かにすることによる思考の複雑化は、問題解決への第一歩なのである。

一時期、世界を席卷したシンギュラリティのアイデアは、いまはやや下火になったが、時代が大きく変わろうとしているということは多くの人が感じていることだろう。その中で成人し、そして成長していく高校生には、複雑なことを複雑なままにキープしていくという思考の体力が必要になる。そのためにも豊富な語彙の必要性は、これからいよいよ増すであろう。

#### 四字熟語は魔法の言葉

さて、私たちの思考力や感受性を高める強力なツールのひとつに「四字熟語」がある。

小学生の時には、授業や四字熟語辞典などで「定義」として学ぶが、中学、高校になると、漢文教材でそれを学ぶようになる。このときはじめて四字熟語が生まれたものとなる。そのときの感動を今でも覚えている。

たった四文字なのに、その中で古代の人たちが生き生きと動き回り、私たちに叡智を与えてくれる。四字熟語とは物語が圧縮されたもので、それを使った瞬間に解凍され、古代の叡智が溢れて来る魔法の言葉だということを知るのだ。

そして、自分が周囲から孤立したときは「四面楚歌」という四字熟語を思い出し、自身を項羽になぞらえ、劉邦との戦いや虞美人との恋なども思い出しながら「力、山を抜き」などと口ずさめば、孤立無援もなんとなく詩的になる。立ち直れないほどの失敗を体験したときも呉王夫差や越王句踐の故事を思い出し、「臥薪嘗胆」で「よし、今日から一年間は甘いものと酒を控えて床に寝るぞ」なんてやってみる。

自分の人生が、漢文の世界と重なるのだ。それを「厨二病」と言わば言え。人生、豊かになった方が勝ちである。

四字熟語のすごさは、何といってもその圧縮力にある。圧縮されたことによつて、それはコンパクトになり、自在に、そして気楽に使うことができるようになる。たとえば「消費税を上げたい。でも、文句をいう人も多そうだから期間限定でおまけをつけます」なんて言われたら、「ああ、これは『朝三暮四』だな」と思うことができる。

四字熟語が可能なのは、漢字という表意を基本コンセプトに置く文字を使っているからだ。一文字、一文字が意味をもつ漢字は、文字ひとつの中に甲骨文字以来の深い記憶を封じ込めている。たとえば「河」は、ただの川ではなく、滔滔と流れる黄河であり、その流域で生まれた黄河文明であり、そして禹王の治水の物語や、黄河流域を巡る古代のストーリーが圧縮された文字である。漢字自体が、読者による解凍を待

つ圧縮された文字なのだ。

また、漢字のすごいところは、漢字そのものが組み合わせによつて無限の可能性をもつことだ。いくつかの要素としての部首や部品を覚えてしまえば、どんなに難しくみえる漢字でもその組み合わせで大抵はこと足りる。これは「難しい文字」がほとんどないということを意味する。シュメール語を記述した楔形文字も漢字と同じ六書（造字の原理）をもつ。教員だったときには楔形文字も紹介しながら六書を教え、そして難しくみえる漢字の解剖などしながら、新たな漢字を覚えた。

新しい漢字を覚えることも、新しい思考、新しい感情を手に入れることである。だから「組み合わせ」によつてそれを容易にしている漢字は、世界最強の文字のひとつであろう。

現代は情報過多の時代である。それに耐えられなくなった現代人は、脳、特に記憶の大部分を Wikipedia などのネット上の百科事典に頼ることで記憶の負担を軽くし、限りある脳の空き容量を増やそうとしている。この傾向はさらに進むであろう。そして、それによつて空いた脳による新たな精神活動も生まれるはずだ。そのために、その時に圧縮した漢字、熟語の寄与は大きいだろう。これからの時代に、漢字・漢文はより有用である。だからこそ、数少なくなってしまう漢文の先生が、まさに貴重な存在となる。

## 意味と定訓

木村秀次  
（元千葉大学教授）

「訓」は漢字の意味を日本語で表したよみである。

漢籍や仏典を読解する歴史の中で、複数の意味に対応する多様な訓が生み出された。その一方、漢字を用いて日本語を書き表す際には、通常対応関係が強く主要な少数の訓にしばられ、固定していく。いわゆる「定訓」である。

ところで、現在、訓といえば、「常用漢字表」の音訓欄の訓が思い浮かぶ。それは一般の社会生活における漢字使用の「目安」として整理された、いわば現代の「定訓」である。もとよりすべての意味をおおってはいないので、意味上のずれが生じることがある。

ここでは、「影」と「情」の二字を例に、意味と定訓の間に見られる隔たりの一端を詩文をもとに考えてみたい。

李白の詩の中から、「影」を含む三首の一節を挙げる。

- a 举杯邀明月、  
对影成三人
- 杯を挙げて 名月を邀へ  
影に対して 三人となる（月下独酌）

五言古詩の三・四句。一人で酒を酌む。杯を挙げて名月を

招き寄せ、自分の影と向き合い三人となった。

b 孤帆遠影碧空尽、  
惟見長江天際流

孤帆の遠影 碧空に尽き  
惟見る 長江の天際に流るるを

（黄鶴樓送孟浩然之廣陵）

七言絶句の三・四句。一そうの舟の遠い帆かげは青空に消えた。ただ長江の天際に流れるのを見るばかり。

c 峨眉山月半輪秋、  
影入平羌江水流

峨眉山月 半輪の秋  
影は平羌 江水に入りて流る

（峨眉山月歌）

七言絶句の一・二句。峨眉山の上に秋の半月がかかる。その月かげは麓の平羌江の川面に差し入り流れる。

訓読は原文の語を最大に生かし、しかも簡潔に翻訳した日本語表現である。特にcの詩は張りのある調べの中にア段音の響きが快く美しい。

さて、本題の「影」である。a詩のそれは、現在普通に

う定訓の「かげ」をさす。ところが、b詩の「遠影」は「遠い帆かげ」の和語で通じるが、「影」の実際は「すがた」を表す。複合語の「人かげ」「後ろかげ」の「かげ」である。c詩の半輪の「影」は月の「すがた」ではあるものの、水面に映って光る。この「影」を「(月の)光」と訳す注釈書も多い。先に「月かげ」としたが、「星かげ」「火かげ」「夕かげ」などの「かげ」に同じである。

李白は漢字「影」を三つの意味に用いた。その中の「すがた」と「ひかり」の意味は、訓「かげ」の複合語の中に生きカバールされる。しかし、単独の「かげ」の訓は、現在では普通そうした意味につながらない。

「情」の定訓は「なさけ」である。「なさけ深い」や「なさけをかける」「なさけは人の為ならず」(中世に生まれたものらしい)などの句にも用いられている。ただそれは、熟語の「情感、情熱、心情、感情、表情」などの「情」に比べ一面的であり、両者の結びつきは弱いと感じられる。

漢字「情」は「卜(心) + 青(青)」の会意兼形声字である。「青」は「まじりけのないあお」を表す。具体的な「情」の用例をほんのわずかであるが、挙げてみよう。

中国、戦国時代の『荀子』(紀元前三世紀)に、  
性之好悪喜怒哀楽謂之情。(二十二・正名)

とある。つまり、荀子は「性(生まれながらの心の本体)の好悪喜怒哀楽」を「情」と考えたのである。続けて後文で、それは「自然に発露するもの」としている。

日本ではどうか。古く『万葉集』(七五九)には、「情」の字が約一三〇首の歌に見られる。それらは「なさけ」ではなく、「通常」「こころ」と訓まれる。二首示すと、

近江おちみの海夕波千鳥な汝が鳴けば情こころもしのにいにしへ思ほゆ  
(3・三六)

うらうらに照れる春日にひばり上じじろがり情悲ひとしも独りし思へば(19・四三)

平安末期の古辞書は、「情」に「ナサケ」とともに「コロ」の訓も載せている。実は「心」にも両様の訓が見られる。後に、二字それぞれに異なる訓を振り分けた感がある。

以下、夏目漱石の『草枕』(一九〇六)の冒頭を挙げるにとどめる。主人公の画工は山路を登りながら考える。

智ちに働けば角かどが立つ。情じやうに棹しやうさせば流される。

意地を通せば窮屈だ。兎角とかくに人の世は住みにくい。

考えを今様体につづめ、「非人情」の世界を描く作品の発端とした。この翌年、漱石は講演「文芸の哲学的基礎」の中で、「精神作用を智、情、意の三に区別します」と述べている。「情」の本質を感情面の「心のうごき・はたらき」と、とらえていたといえよう。

## 法律のフシギなことは

おおかわらまみ  
大河原眞美  
(高崎経済大学教授)

法律のことばは難しいと思っていませんか。ところが、漢文の素養があると法律のことばはかなりわかりやすくなりま  
す。刑法の条文を例に見てみましょう。

### 訓読文のような法律条文

法律の漢文的特徴として四字熟語が多いことが挙げられま  
す。刑法105条の2に四字熟語の「強談威迫」があります。  
(以下引用部傍線は全て筆者)

自己若しくは他人の刑事事件の捜査若しくは審判に必要  
な知識を有すると認められる者又はその親族に対し、当  
該事件に関して、正当な理由がないのに面会を強請し、  
又は強談威迫の行為をした者は、二年以下の懲役又は  
三十万円以下の罰金に処する。(刑法105条の2)

刑法105条の2は、証人威迫罪が定められていて、暴力団  
のお礼参りなどを禁止することが趣旨です。相手を従わせよ

うと強引に強い調子で談判し脅す、「強談威迫」をすると、  
二年以下の懲役か三〇万円以下の罰金が科せられます。

この条文には、漢文の訓読に由来する選択を表す接続語の  
「若しくは」が使われています。すべての選択の接続語に  
「若しくは」を使うのではなく、この条文のなかで「自己」  
や「他人」などの構文上の小さな要素どうしの選択には「若  
しくは」、「強請し」や「強談威迫の行為をし」のようなより  
大きな要素どうしの選択には「又は」が用いられています。  
次に、刑法の234条の2の電子計算機損壊等業務妨害罪  
を見てみましょう。

人の業務に使用する電子計算機若しくはその用に供する  
電磁的記録を損壊し、若しくは人の業務に使用する電子  
計算機に虚偽の情報若しくは不正な指令を与え、又はそ  
の他の方法により、電子計算機に使用目的に沿う動作を  
させず、又は使用目的に反する動作をさせて、人の業務

を妨害した者は、五年以下の懲役又は百万円以下の罰金に処する。(刑法234条の2①)

ここでも、小さい要素どうしの選択の「若しくは」と大きな要素どうしの選択の「又は」が使われ、一文一五五語からなる長文の理解を助けています。この条文には、「電子計算機」や「電磁的記録」などの聞きなれない漢語があります。「電子計算機」はコンピュータ、「電磁的記録」はフロッピーディスク(FD)、コンパクトディスク(CD)、ミニディスク(MD)などの光ディスクです。コンピュータなどの外来語を避けて、新しく漢語を作って対応したのです。さらに、データを示すことばに資料や知識全般を表す「情報」が使われており、外来語アレルギーのようです。条文の趣旨は、コンピュータや光ディスクの破壊によるコンピュータ上の業務妨害の禁止です。日常語ではコンピュータなどの外来語しか使わないので、法典のために編み出されたこれらの漢語が何を指しているのかわからない人も少なくないでしょう。

### 漢語・漢文志向のルーツ

刑法だけが漢語・漢文志向というわけではありません。第二次世界大戦前の文章はすべて漢文調でした。明治四〇(一九〇七)年に制定された刑法も、平成七(一九九五)年

に改正し口語化されるまで文語体のカタカナの条文でした。改正前の刑法百五条ノ二は、次のように書かれていました。

自己若クハ他人ノ刑事被告事件ノ捜査若クハ審判ニ必要ナル知識ヲ有スト認メラルル者又ハ其親族ニ対シ当該事件ニ関シ故ナク面会ヲ強請シ又ハ強談威迫ノ行為ヲ為シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ二十万円以下ノ罰金ニ処ス(刑法百五条ノ二)

戦後の昭和二一(一九四六)年の憲法改正草案から平仮名・口語体が用いられ、これ以降立案される法令はすべて平仮名・口語体で書くことになりました。憲法は施行時の一九四七年から口語体です。しかし、大日本帝国憲法下で制定された法律は、刑法に限らず、民法も商法も文語体のままでした。刑法は平成七年、民法は平成一六(二〇〇四)年、商法は平成三〇(二〇一八)年五月に改正が公布され、一年以内に施行され、これで基本六法はすべて口語体になります。確かに法律は口語体で書かれるようになりましたが、刑法を見てもわかる通り、カタカナを平仮名に変える、濁点や句読点をつけるなどの作業のみで、難解な四字熟語はそのままで、漢文訓読体の影響は強く残っています。このため、法律の文章は、漢文の素養がないとわかりにくいフシギな文章です。漢文は古典だけでなく法律の世界のことばでもあります。

## 江戸時代に生まれた医学用語

にしじまゆうたろう  
西嶋佑太郎

(京都大学医学部附属病院精神科神経科)

二〇一〇年に改定された常用漢字表には「腫瘍」「咽喉」「梗塞」「脊椎」「腎」「腺」など医学用語に使用される漢字が数多く追加された。教育で医学用語の意味用法まで取り上げる必要があるかはさておき、目に触れる機会は増えると思われる。

医学の世界で使われる医学用語には「神経」や「盲腸」のような一般になじみのあるものから、専門家の間でしか使わない複雑なものまでさまざまなものがある。「筋萎縮性側索硬化症（ALS）」のような複雑な用語も、「筋／萎縮／性／側索／硬化／症」のように、実は一／二／字の漢語（語基）を組み合わせたものであり、裏を返せば漢語の語基の組み合わせ次第でかなり複雑なものを表すことができる。漢語語基は和語語基に比べて合成して用語を作りやすい、すなわち造語能力が高いことが知られているが、その基本となる語基には、漢方医学で用いられる語はもちろん、江戸時代から明治時代にかけて蘭学者や医師たちが西洋医学を表現しようとしてき

たものも多く含まれている。

西洋医学はキリスト教宣教師による伝来、次いで江戸時代に長崎に來たオランダ人や招來されたオランダ医学書から学ぶ形で伝わった。特にオランダとの交易は主に長崎を通して行っていたため、長崎にはオランダ語に長けている長崎通詞（通訳）と呼ばれる人々がいた。例えば本木良意という通詞は『解体新書』からさかのぼること百年近く前に既に解剖図譜の翻訳を行っていた。『和蘭全軀内外分合図』という本には「指十二幅腸」「盲目腸」などの訳語が見られる。これらは現在の「十二指腸」「盲腸」といった用語につながっていった。江戸時代初期にはほかにも医学用語集が作られており、オランダ語からの翻訳が日本語に影響を与えた最初期のものと思われる。

蘭学者たちはオランダ語から日本語への翻訳に苦心した。解剖学書を翻訳したことで名高い『解体新書』では、翻訳の

方法を大きく三つに分けた。『解体新書』でつかわれた言葉でいうと、①「翻訳」、②「義訳」、③「直訳」の三つである。①「翻訳」はオランダ語に対応する漢語を当てはめることを指し、「骨」を例に挙げる。

②「義訳」はオランダ語の意味を考えて漢語を当て、時に創出することを指し「神經」や「軟骨」がそれに当たる。

③「直訳」は「キリール」(後の「腺」)のように該当する言葉がなく音をそのまま使ったものを指した。

このうち蘭学者が最も重視しかつ苦心したのが②の「義訳」であり、ここで漢字一〜二字程度に表現した成果が現代の医学用語までつながっている。③の「直訳」の用語も後に別の訳書などで漢語が当てられて使用されていくものがあつた。

この時代の用語は蘭学者が考案した用語が乱立し、そのなかで淘汰され残つたものが現代に伝わっている。淘汰されてしまった用語の例として稲村三伯(海上随鷗)の訳語がある。稲村三伯は『波留麻和解』という最初の蘭日辞典編纂に従事した蘭学者で、後に海上随鷗と名を改めて医学書を翻訳した。その際に独自の文字を千字ほども作って使っていた。③「直訳」の部分も新作漢字に落とし込もうとする意欲はあつたが難解であり、また著作も多く広まらなかつたため用語として定着しなかつた。これ以外にも多くの蘭学者・医師がそれぞれ考案した訳語を使用していたが、どの訳語も漢字や漢語の

組み合わせで表現するという点に関しては共通していた。漢字(国字)を作つて定着した医学用語の例として宇田川榛齋うだがらによる「腺」「臍」がある。宇田川榛齋は稲村三伯とともに『波留麻和解』編纂にも従事した蘭学者・医師であり、『西説医範提綱せいせついはんていこう積義』という本の中で、『解体新書』では「キリール」「大キリール」とされていたものを「腺」「臍」という字を自ら作つて表現した。これらは宇田川榛齋が用い始めたものだったが、著作が広まるにつれて医学分野全体に浸透するようになり、医学以外の世間一般や、はては中国や韓国にも伝わり使用された。最近では『君の臍臓を食べたい』という小説のタイトルにも使用されたのは記憶に新しい。

明治時代以降には、大学で医学を学ぶようになったり専門学会が用語の整理に着手したりしたことで、医学用語がさらに淘汰、整理され、難しい漢字を用いた用語は簡単な漢字に置き換えられた。医学は常に最新を追い求め、それに従つて用語も生まれ変化していくが、調べてみると実は江戸時代ころから受け継がれてきたものも数多く残っている。

#### 参考文献

- i 高野繁男「医学用語における語基と基本漢字」人文学研究所報十七
- ii 杉本つとむ『解体新書の時代』
- iii 笹原宏之「国字の位相と展開」

## 【授業実践】漢語を身近に感じる授業

### ——創作熟語の試み

杉山 明 すぎやま あきら

(津山工業高等専門学校)

#### 音読みと訓読み

日本人の漢字力の低下が指摘されるようになって久しい。

筆者の所属校の学生諸君も例外ではなく、特に一、二年生の段階では、やたらひらがなの多い文章を提出してくれる。彼らの書く誤字、あるいは書くべき漢字のひらがな書きを見ていると、漢字一字一字が持つ「意味」を理解していないことが感じられる。

今さら言うまでもないことだが、漢字は表意文字であるから、すべての漢字が意味を持つ。その意味を表しているのが「訓読み」なのだが、学生諸君は熟語の学習には熱心でも、改めて「訓」を確認しようとはしない。「訓読み」なんかは小学校でやったからもういい、と思っているのかもしれない。実はこれはテキストにも責任がある。一般的に高校現場で使用する漢字テキストは漢字検定に対応したものが、出題のほとんどは熟語、つまり「音読み」である。「音読み」は発音記号であって、字義とは直接関係しない。これではせっか

くの漢字学習も、なかなか定着しないだろう。

#### 漢字の表意性と造語力

漢字の表意性を理解させるために、筆者は例えば次のような問いを発している。

1. 中国映画の一場面、主人公が病院を訪れ、待合室に入ると壁に大きく「肅」とだけ書いてあった。どういう意味か。
2. 同じく中国映画、主人公の運転するバイクがカーブにさしかかると「漫」という標識があった。どういう意味か。

もちろん、少し漢字の字義に関心のある学生なら「静かにする」「ゆっくり走る」と簡単に答える。興が乗ればもう一押し。次は熟語である。

3. 「血栓性静脈炎」とは、どのような病気か。

こんな単語を聞いたことのある学生がいるはずはない。しかし「血が静脈に詰まって血流が阻害される病気」ではないかと想像される。初めて聞いた単語なのに意味が類推されるのは、その熟語を構成する漢字一字一字が意味を持つからだ。ちなみに「血栓性静脈炎」は、英語では thrombophlebitis というらしい。ところがアメリカやイギリスで道行く人にこの単語の意味を尋ねても、答えられる人はほとんどいない。もしいたとしたら、その人は医者か看護師だろう。アルファベットはそれ自体に意味はなく、字面から意味を取ることができないからである。

「血栓性静脈炎」という単語は、漢字の造語力の高さをも証明している。日本の医学者は「血栓性静脈炎」という病気の症状を見極めて、それを表すのに最もふさわしい漢字を用い、「血栓性静脈炎」という単語を創作したのである。ちょうど、明治の漢学者が freedom を意味する単語として「自由」を、government を表すために「政府」という語を作り出したように……。

創作漢語の試み

漢字は一字一字が意味を持ち、かつ造語力が高いのだから、

現代人たる我々が、新しい漢語を作ったって悪くはない。幸いにして今はカタカナ語が溢れている。試みに「身の回りのカタカナ語を漢字で表してみよう」という授業を行った。

授業は、次の手順で行う。

(1) 大和ことばや漢字語訳のできていない、または確定していないカタカナ語七、八単語を提示し、十分ほど考えさせる。

\* 漢和辞典は引いても構わない。

\* スポーツカー ↓ 運動自動車のような直訳単語の組み合わせは不可。

(2) 全部ができなくても良いから、時間が来たら提出または発表させる。

- |                 |
|-----------------|
| ①メンテナンス ↓ 保守管理  |
| ②スマートフォン ↓ 賢能電話 |
| ③ナビ ↓ 索地機       |
| ④ビタミン ↓ 生命素     |
| ⑤ヘリコプター ↓ 垂上機   |
| ⑥スクリュー ↓ 旋進羽    |
| ⑦サングラス ↓ 太陽眼鏡   |
| ⑧ヘアドライヤー ↓ 髪乾機  |
| ⑨ボールペン ↓ 圓珠筆    |

じっくり考えるよりも、直感的なものの方が良いものが多いような気がする。

上は、学生諸君による名作。⑥の「旋進羽」などは秀逸で、思わず唸られた。

もちろん失敗作もある。⑦は、直訳に過ぎず熟

語感がない。「太陽鏡」ならまだしも……。

⑧は、「髪」を「乾燥させる」から「髪乾機」としたのだが、造語法が間違っている。動詞―目的語とすべきなので「乾髪機」でなければならぬ。こういう間違いが出たら漢語の構造を説明するチャンスである。この時も教室全体に対して、山に登るのは「山登」ではなく「登山」、構造は英語と同じ、という説明をすると、ああなるほど、という雰囲気が出た。

⑨は、中国語からの拝借。これを防ぐためには、準備させないことが必要。故に創作漢語の授業は予告しない。この解答を出した学生は母親が中国人だった。

参考までに①から⑥の語の中国語は、それぞれ、

- ①維持・保養
- ②知能電話
- ③領航機
- ④維生素
- ⑤直升飛機
- ⑥螺旋槳

である。基礎となる漢字力の差も当然ながら、日本人と中国人の感性の相違もあるのかもしれない。

ついでに読者の皆さん（先生方？）にも考えていただく。以下のカタカナ語を漢語に直しなさい。

- a. ロケット
- b. レンズ
- c. アイドル
- d. シャープペン
- e. フォークリフト

## 漢語の効用

技術や社会の進歩に従い、多くの新語が生まれ、あるいは外から入ってくる。かつては外来語であっても、これを漢語に訳していたが、今はそのままカタカナ語として受け入れている。それが時代の流れというものなのだろうが、少なくとも筆者には理解し難いことはなほだし

い。

例えば以下のようなパソコンの説明書である。  
ディスプレイ上のカーソルをマウスでアイコンに合わせ  
てダブルクリックする。

これで理解できる初心者がいるとは思えない。試しにこのカタカナ部分を漢語に置き換えてみる。熟した漢語がないので、筆者が適当に造語する。

画面上の矢印を鼠子機で標識に合わせて連打する。

筆者の所属校は工業高専であるから、「高齢者に使いやすいパソコン開発」を目指す学生もいる。しかし彼らの考えることはせいぜいボタンを押す回数が二、三度減る程度のものである。その前に、解説書のカタカナ語を漢語化するだけで、ずいぶん分かりやすくなるだろう。そんなことができれば、日本人の漢字力も向上するに違いない。

念のため、筆者案をお示しいたします。  
中国語も調べてみると面白いと思います。

a. 噴進    b. 曲面鏡    c. 幢星    d. 尖鉛筆    e. 提運車

## 【授業実践】漢字の秘密を知って、便利に活用しよう

——国語総合における漢和辞典を用いた授業開き

池浦恵里いけうらえり

(北海道南富良野高等学校)

はじめに～授業のねらい～

本校は南富良野町立であり、全校生徒六十四名の小規模校である。地元からの入学生が中心であるが、近隣の市町村の中学校からの入学生に加え、遠隔地から入学する生徒もいる。

比較的広い範囲の、環境の異なる地域からの入学生がいることもあり、年度当初の授業開きの段階で、学力や授業への取り組み方の差などをできる限り改善し、生徒の目を授業へ向けさせ、後の授業展開の足掛かりとなることが求められる。ゆえに、生徒にとって身近なものを用いて、興味関心を高め、次の授業に繋がられるよう工夫したい。

今回教材として用いるのは、生徒自身の名前である。自分の名前に使われている漢字というなじみの深い教材を用いて、漢字には字義があるということを認識し、漢字への興味関心を高めることを目的とした単元をデザインした。

実践 漢字の字義の存在を認識するために

(一) 漢字の秘密は字義にあり

自分の名前の各漢字を漢和辞典で引き、字義をすべて書き出す。これにより、漢字一字に様々な字義が内包されているということがわかる。漢字は単なる記号ではなく字義に大きな意味があるということが、この活動を通して認識できる。そして、字義の中から、図一のように、自分が気に入ったものを一つ選んで、線を引く。

また、この授業内で、漢和辞典の引き方について確認することができ、中学校までの使用頻度は、生徒によって差があるため、この段階で使用の仕組みについて確認をさせ、その後の授業展開で使用する際の足掛かりとする。

ところで、名に仮名文字等の漢字以外の文字を用いている生徒は少なくない。その場合についても、以下の例のように対応する。



ら説明するようにさせると、円滑に進められる。本実践では、ワークシート記入時間のうちに板書させておくこととした。

### (3) 事前準備・留意事項

指導者は、生徒の名簿をあらかじめ確認し、生徒が調べた際にネガティブなイメージで捉えてしまう要素が含まれていないかどうか検討、確認をする。懸念される漢字があった場合は、あらかじめ検証、解決策を考えておく。生徒に対してフォローを入れる際にも、指導する側が生徒状況に合わせて、臨機応変に対応することが求められる。

また、授業の冒頭で特に生徒に対して言及しておくべきなのは、命名者とその漢字を用いた意図や、名前の由来に関して取り扱う授業ではない、ということである。あくまで「自分の名前に使用されている漢字が、どのような字義を持つか」という観点で取り組ませたい。

### (4) 実践後の生徒の様子とコメント

中学校からの継続した交友関係がある生徒同士については、互いに名前を見比べ、普段の性格等と照らし合わせて評価をし合う姿が多く見られた。また、高校で初めて会った生徒同士においては、自己紹介の一端を担っていた様子が見られた。授業のまとめの際に、生徒にコメントを求めたところ、左

のような感想を得ることができた。

生徒A…漢字のイメージと、その人の普段の姿が意外と

被っていて、面白かった。

生徒B…自分の名前の漢字が持っている意味がわかって、

「へえ」って思った。

生徒C…苗字は知っていたけれど、下の名前まではあまり

わかってなかった。今回の授業でみんなの名前まで覚えることができた。

### まとめ

今回は、年度当初という状況もあり、生徒は真摯に取り組んでいた。特に、授業終了後の休み時間にも、生徒同士で名前の漢字について言及し合う会話が聞かれた。このように、自分の名前を教材として用いることで、漢字の字義の存在を認識し、漢字への関心を高めることができた。

また、この授業開きをきっかけとして生徒が自己紹介をし、互いの名前について交流する機会を設けることも可能であることがわかった。

今後は、この授業開きで得た学びを、その後三年間の授業展開の中で生かせるよう、漢文や漢字に関する授業との連続性を高めることを課題とし、アレンジを加えていきたい。

## 興味関心を引き出すための 中学校の漢文授業

小金澤 豊

(埼玉県八潮市立大原中学校)

現在、小中学校の国語教科書を扱うのは五社ありますが、これらすべての教科書に共通して採られている教材があります。第一学年での「故事成語」、第二学年と第三学年での「論語」や「漢詩」です。指導時間数も限られた中でこれらの教材を通して漢文に興味を抱けるように子どもたちを導き、義務教育終了後も漢文が持つ豊かな世界に関心が向けられるような指導をするところですが、中学校段階に課せられた課題ではないでしょうか。

現行の教科書では、「漢文」に対する定義の仕方が必ずしも明確であるとは言えません。まず「漢文とは何か」をきちんと押さえたうえで授業を進めることが必要なこととは言ってもありません。筆者は「中国の古典文の形式で書かれた詩文」という言い方で生徒に提示しています。この場合、作者の国籍は問わないことを確認します。それを怠ると、高校に入ってから学習する「日本漢文」という言葉の意味がわからない

いままになってしまい、漢文学習そのものに支障が生じることを危惧するからです。生徒に漢文の定義をはっきりと示してから漢文学習を始めることが、導入時にまず押さえるべき点です。

漢詩の授業を例に話しましょう。漢文に興味を持たせる方法の一つとして、漢詩を現代中国音で読むことはお勧めです。授業担当者ではなかなかそこまでは、という場合には、音声教材も比較的容易に入手が可能です。中国語の発音から押韻にも容易に理解が進みますし、生徒の顔つきがらりと変わってきます。

興味付けに成功したら漢詩についての説明に入ります。行数と文字数から五言、七言、絶句や律詩といった名称に触れるのももちろんですが、二字と三字のまとまりとして漢字を認識させながら詩全体の意味をつかめるように進めることが必要です。高校の新学習指導要領「古典探究」では漢詩の創作も入ってきます。同指導要領の解説

には、「五言の句は意味の上で二字と三字の構成となり七言句は四字（二字と二字）と三字の構成」を確認させるとあります。したがって中学校段階でも、二字三字の漢字のまとまりに気づかせながら漢詩を鑑賞する指導することは、中高の円滑な接続を図る上からも必要になります。

杜甫の「絶句」には色彩を表す語が出てきます。漢詩そのものを模造紙に書き大きく提示し、「江」「碧」は緑色、「鳥」「白」を白色、「山」「青」は青色、「花」「然」を赤色の紙の上にその漢字を書きます。こうすることから生徒のイメージが喚起されます。黒板の隣には中国全土の掛け地図を用意して現代の四川省の地が詩の舞台となっていることにも言及すれば、生徒の想像力がより増すことでしょう。

中学生の頭から、漢文は難しいものだという言われなき先入観や印象を取り除き、高校への興味付けや発展学習の入り口となるような授業展開をすることができたらと考えます。

# 大漢和辞典 デジタル版

生徒の興味・関心を深める探究型学習に！

## 1. 選べる検索方法

漢字、大漢和番号、Unicodeのほか部首、総画、音訓、漢字の「部品」からも全ての親字を検索できます。

## 2. 読みやすいページビューア

本文は1ページ単位の画像で表示。書籍の約4倍まで拡大可能！さらに、複数ページを見比べることができます。

## 3. 役立つジャンプ機能

本文中の参照字や、どのページ、どの巻にもすばやく移動できます。

## 4. 便利なカスタマイズ機能

お気に入り、付箋など調べものに役立つ機能が充実。

諸橋徹次 [著]

鎌田正・米山寅太郎 [修訂増補]

本体：130,000円＋税

(USBメモリ1本、化粧函入)

ISBN：978-4-469-79083-2

2018年11月28日発売



『大漢和辞典デジタル版』を使った授業実践は次のページ

漢字への興味を広げる

## 『大漢和辞典』デジタル版

小澤 隆

(昭和学院秀英中学校・高等学校)

あの『大漢和辞典』が、ついに電子化されました。

電子辞書といえば、書籍の辞書と比べて持ち運びが容易で、検索が速い点が特徴的です。一方で、多くの電子辞書は、検索対象の項目のみを表示し、それ以外の内容を表示しません。合理的で無駄がないと言えば聞こえはいいのですが、辞書から新たな発見をする機会が少なくなり、味気ない印象を覚えてしまいます。

『大漢和辞典デジタル版』は、検索結果として、書籍版の『大漢和辞典』の紙面がそのまま表示されます。検索対象の項目だけでなく、前後の項目までもが表示されるわけです。これは、電子辞書としては、実はなかなかすごいことです。

ノートパソコンにインストールして、教室に持ち込んでみます。近頃は、書籍の辞書よりも電子辞書端末を選ぶ生徒がかなりの割合になっています。そんな生徒たちに、書籍の漢和辞典にも興味を持ってもらいた

い、あわせて、漢字の豊かさを垣間見てもらいたいと思っています。

「デジタル版」をプロジェクタや電子黒板に映像を出力します。紙面をそのまま生徒に見せようというわけです。内容じたいは生徒にとってはやや難しいでしょうから、ここでは内容には深入りせず、紙の辞書を引く雰囲気は伝われば十分ということにしておきます。

この原稿の執筆時点で、『奥の細道』を授業で扱っています。「予もいづれの年よりか……」とあるので、「予」を引くことにします。検索するとすぐに紙面が表示されますから、内容を確認したら、しばらくはそのまま投影しておきましょう。ほどなくして、「予」の項目のすぐ近所の、「去」や「上」といった謎の漢字の存在に気づく生徒が現れるはずですよ。「そんなヘンな漢字があるのか。辞書を引いたらほかにも意外な漢字が見つかるのではないか。」そんな疑問が生徒の間に生まれればしめたものです。可能であれば、ここで生徒自身にも『大漢和辞典』に触れさせる場を作ることができれば、辞書や漢字への興味をより深めるきっかけになりそうです。

この展開には、どの項目を見せると生徒



【大漢和辞典 デジタル版】特設サイト  
[https://www.taishukan.co.jp/daikanwa\\_digital/](https://www.taishukan.co.jp/daikanwa_digital/)

の興味を引きそうか、教師側の下調べが必要になります。収録されている親字を参照する際には、総画数索引で一画ずつ増やして検索するとよいでしょう。検索結果を親字のみの表示に切り替えれば、一覧性も確保されて探しやすいです。この作業は、わたしたち教師にとっても新たな発見の連続になるはずです。

『大漢和辞典デジタル版』は、書籍の辞書と電子辞書の双方の長所をあわせ持つ、きわめて特異な存在です。これまでにない活用によって、様々な学びを私たちに与えてくれるでしょう。

## 『大漢和辞典』編纂史

## ■戦時下での巻一刊行と

戦災による原版焼失

鈴木一平（大修館書店創業者）が、諸橋轍次（当時、東京高等師範学校教授）を訪ねて漢和辞典の編纂を依頼したのは今から九十年以上も前の大正末年のことである。一九二八（昭和三）年、編纂作業が始まり、諸橋が教授を兼務していた大東文化学院（現在の大東文化大学）での教え子を中心として、先行字書や経史子集（経書・歴史・諸子・詩文集）にわたる古典籍から語彙を選んでカード化した。カードは三十万枚という膨大な量に達したため、一巻本の予定であった計画を拡大することになった。

一九四三（昭和十八）年九月十日、戦時下での出版統制など困難な状況下で巻一を刊行。引き続き巻二を刊行すべく準備を進めていたが、組版工場にあった巻二以降の原版活字約六万本は空襲によって巨大な鉛の塊と化してしまった。危機感を抱いた諸橋は、巻二以降の校正刷を急遽疎開させた。

## ■初版刊行

戦火の余燼燦る一九四五（昭和二十）年

十月、早くも諸橋は、近藤正治・小林信明・渡辺末吾・鎌田正・米山寅太郎といった東京文理科大学出身者とともに、戦災を免れた校正刷をもとに編纂事業を再開した。活字組版を失ったため、従来の活字をやめ、新しい写真植字を利用することとなった。写真植字による五万字は、「写研」創業者である石井茂吉により、八年の歳月をかけて完成された。

昭和三十年、文化の日を期して第一巻が、五年後の昭和三十五年五月に最終回配本の第十三巻（索引）が刊行され、三十五年の歳月と延べ二十六万人の労力、および巨額の経費が注ぎ込まれた『大漢和辞典 全十三巻』が完成した。

## ■修訂版

『大漢和辞典』を不朽のものとするため、諸橋はその修訂作業を鎌田正（当時、東京教育大学名誉教授）と米山寅太郎（当時、静嘉堂文庫長）の両氏に委嘱した。修訂に当たっては、その膨大な語彙の典用例を再調査するほか、字音・解字などに修正が加えられた。修訂版は一九八六（昭和六十一年）年に全十三巻が完結した。

## ■修訂第二版・『語彙索引』を刊行

『大漢和辞典』は、旧字・旧仮名遣いを

用いており、熟語もその読みにしたがって配列されている。これを検索しやすくするため、熟語を現代仮名遣いによる五十音順で配列した『語彙索引』を加えた修訂第二版（全十四巻）が、一九八九（平成元）年に刊行され、『大漢和辞典』は利便性を増すこととなった。

## ■『補巻』を刊行

初版発行から三十五年、その後の新しい資料や全十三巻に収録できなかった漢字、語彙を収録した

『補巻』が二〇〇〇（平成十二）年四月に刊行された。親字八百余字と語彙三万三千余語を増補収録、全十五巻となつて九十年を超える編纂事業はここに完結した。



『大漢和辞典』全15巻・B5判・上製・函入  
定価：本体240,000円＋税

## 第1回 諸橋轍次記念 漢字文化理解力検定

2018年9月30日、新潟県三条市(旧下田村)の諸橋轍次記念館において、「第1回 諸橋轍次記念 漢字文化理解力検定」が実施された。当日は、台風の影響で、近づくあいにくの天候にもかかわらず、県内外65名の漢字愛好者が検定に挑んだ。小学生から最高齢は87歳まで、真剣な表情で60分の試験問題に取り組んでいた。



第1回検定成績優秀者のみなさん(表彰式にて)

漢字文化理解力検定は、諸橋轍次博士の業績と漢字文化を、次代に継承することを目的として三条市の主催で創設された。出題内容は、単に漢字の読み書きにとどまらず、「漢字文化に関して、総合的な知識と理解力を問うもの」とされ、第1回の試験問題には熟語や国字の知識を問う問題も含まれていた。受検者にとっては総じて難しかったようだが「楽しかった」「来年も挑戦したい」との声もあった。検定では得点に応じ、参段〜四級が認定される。成績優秀者については、順に「漢哲」「漢賢」「漢俊」また、最高齢段位認定者には「碩学大儒」、最年少段位認定者には「少壮気鋭」の称号が与えられる。当日は阿辻哲次氏による記念講演も行われた。記念館の展示も無料で見学でき、下田の豊かな自然とともに楽しんだ受検者にとっては、まさに漢字文化に浸る一日。地域活性の可能性を感じるイベントとなった。

(編集部)

漢字文化理解力検定委員会(敬称略)  
阿辻哲次(委員長)、塚田勝郎(副委員長)、笹原宏之、田満字二郎、渡辺健

第2回検定は2019年秋を予定している。問い合わせはHP (<http://morohashietsuji-kenie.com/>)か、諸橋轍次記念館まで。

### ◆漢学の里 諸橋轍次記念館

「開館時間」午前9時〜午後5時(入館は閉館30分前)

「休館日」毎週月曜日(祝日の場合は翌日)、12月29日〜翌年1月3日

「住所」新潟県三条市庭月434-1

(道の駅 漢学の里しただ)が隣接

「電話」0256-4712208

「ブログ」<http://morohashietsuji.blog.fc2.com/>



諸橋轍次記念館(内部)

刊行 6 月予定！

◎大好評、『三国志事典』の姉妹編が誕生！

# 三国志演義事典

渡邊義浩・仙石知子 [著]

魅力溢れる英雄たち、珠玉の名場面、ゆかりの故事成語など、『三国志演義』のすべてを凝縮した総合事典。『演義』の創作部分は、書体を変えて一目でわかるようになってるので、正史との違いも楽しめる！ 年表・索引完備。



## 本書の特色

〈主要目次〉

第Ⅰ章 『三国志演義』の  
形成と展開

〈みどころ〉

『三国志演義』成立の背景や、小説・映画など、後世での受容について解説。

第Ⅱ章 英雄たちの時代

『演義』の登場人物について、詳しく解説。主要人物は図版付き！

第Ⅲ章 魏の人物

第Ⅳ章 蜀の人物

第Ⅴ章 呉の人物

第Ⅵ章 後漢・西晋の人物



第Ⅶ章 名場面四十選

第Ⅷ章 戦いの諸相

「泣いて馬<sup>ばばく</sup>護を切る」など、珠玉の名場面を取り上げ解説する、本事典の白眉。

第Ⅸ章 謀略と表象

敵を巧みに欺く「謀略」と、人相・武器など各人物を象徴する「表象」を解説。

第Ⅹ章 関帝信仰

第Ⅺ章 資料集

充実した地図・年表のほか、三国志由来の故事成語もご紹介！

索引

# 『三国志演義』から中国人を読み解く画期的な総合事典

伊藤晋太郎  
（二松学舎大学）

渡邊義浩氏と仙石知子氏による『三国志演義事典』が間もなく刊行される。これまでに『三国志演義』（以下、『演義』）の事典といえ、我が師である沈伯俊先生の『三国志演義辞典』（譚良嘯氏との共著、巴蜀書社、一九八九年。のちに改訂版『三国志演義大辞典』中華書局、二〇〇七年）があったのみで、我が国においては渡辺精一氏による人物事典（『三国志人物事典』講談社、一九八九年。二〇〇九年に講談社文庫版）があるのみであった。このたび日本の研究者による初の『演義』の総合事典が登場することを心より言祝ぎたい。

ひと口に「三国志」といっても、歴史書である正史『三国志』と小説である『演義』があり、日本でも、本場中国でも『三国志』といえ、意識的と無意識的を問わず、『演義』を指している場合が多い。小説『演義』に含まれる虚構が史実と認識されていることも往々にしてある。それゆえ、最近では『演義』を嫌い、正史に真実を求め

ることのみを是とする向きが増える傾向にあるように見受けられるが、虚構の存在をもって『演義』が軽視、または無視されることは甚だ残念である。なぜなら、『演義』の虚構の成り立ちや背景を読み解くことこそ、中国の文化や中国人の思想を探究することに直結するからである。評者はこのことを機会あるごとに口を酸っぱくして強調してきたが、なかなか理解されないことに歯がゆい思いをしてきた。

そこで本事典である。本事典には多くのユニークな特色があるが、中でも特筆に値するのは、全十一章のうち第三章〜第六章にわたる人物小伝と、第七章の「名場面四十選」である。人物小伝は単に作品の中で設定や行動について解説しているだけではない。『演義』独自の虚構が書体を変えて表記されることで、一目瞭然となっている。虚構部分に注目して通読することで、『演義』に結実する「三国志」物語を紡いできた中国人の志向や価値観が浮き彫りになろう。

そして「名場面四十選」には、どのページを開いても名場面ばかりといわれる『演義』の中から厳選された四十の場面が取り上げられるが、こちらも単に各場面の内容紹介にとどまらない。『演義』の通行本となつた毛宗崗本に付された毛宗崗のコメントを手がかりにして、その場面がいかなる思想的あるいは社会的背景や創作意図を持つて描かれているかを簡潔かつ明晰に解説する。この部分については、『演義』研究がこれまで版本研究や成立史研究に偏る中、作品内容の研究に正面から取り組んでこの分野を牽引してきた仙石氏の学殖がいかななく発揮されている。

他にも触れておきたい本事典の特色はあるが、紙幅が尽きた。上記二つのパートだけでも、『演義』の魅力と価値を存分に伝えてくれる。評者もこれまでの溜飲が下がる思いがした。ぜひ広く江湖の読書子、特に最近「三国志」に興味を持たなくなっている若い世代にお薦めしたい。

## 演義と正史を往還する事典

いちもと  
市元 塁

(東京国立博物館主任研究員)

近年の技術革新は表現媒体の多様化をうながし、これと相呼応して物事に対する関わり方も多様となった。三国志を取り巻く状況も例外ではなかった。人々はあらゆる媒体を通して三国志とつながり、多様な情報を収集しながら思い思いに独自の三国志像を構築しているのである。このこと自体は、各人の主体的な文化活動ともいえ大いに歓迎すべきことである。しかし他方では、原点との乖離が止めどなく進行するのではとの懸念も拭えない。昨今の状況をこのように推量するとき、『三国志演義事典』(以下、本書)という良質な基礎文献は、三国志の世界にわづかなりとも関心を寄せる全ての人に温かく迎えらるることだろう。

このたび渡邊義浩氏と仙石知子氏の共著として上梓される本書は、二〇一七年に出版された渡邊義浩著『三国志事典』(以下、前書)の姉妹本と位置付けられ、構成や体裁の多くを前書に拠っている。これに加え本書の「第三章 魏の人物」から「第六章

後漢・西晋の人物」にかけての人物説明では、演義に関わる部分は書体を変えて、正史との違いが峻別できるようになっている。この単純ながらも考え抜かれた配慮により、読者は三国志の世界の重層的な形成過程をも読みながらにして感得するのである。ところで渡邊氏は前書を主観的な事典と位置付けた。本書も基本的にはその方針を貫いているとみえるが、このことは読者が三国志に対する理解を深めるうえでたいへん有効であると私は考える。何となれば、主観的な事典であるからこそ読者もまた自身の内なる主観的な三国志を一度客観的に捉え直すことができ、より深い理解へとつながることが可能となるからである。

兎にも角にも高い完成度を誇る本書であるが、なかでも「第七章 名場面四十選」と「第八章 戦いの諸相」は秀逸である。この両章を紐解くことで、話の推移と人物の相関関係とが見事に整理されるだけでなく、三国志演義そのものの魅力がこの両章

に示されているからである。

評者は東アジア考古学を専門とし、今年の夏に東京国立博物館で開催する特別展「三国志」を担当している。近年、漢三国の考古学調査・研究は目覚ましい成果を挙げており、例えば曹操、曹休、朱然、士燮といった人物について出土文物を通して実像に迫ることが可能になった。また遼東の公孫氏と倭との関係についても新たな物証が出てきている。本展はこうした研究動向をふまえ、後漢時代から西晋時代の文物を中心とした「リアル三国志」の世界を来館者の眼前に再現することを目指す。このような本展においても、展覧会図録はもとより本書のような事典も信頼のおける案内人になると確信する。特別展の鑑賞前にあるいは後に、さらには鑑賞のお供として本書を開いてみてほしい。読者は『三国志演義』とその深層にある正史『三国志』の世界を往還すると同時に、これに出土文物を加えた三国志の実像を垣間見ることができらるだろう。

### ◎特別展「三国志」

東京国立博物館 19年7月9日～9月16日  
九州国立博物館 10月1日～20年1月5日

著者のことは

## 『三国志演義事典』の出版に寄せて

わたなべよしひろ  
渡邊義浩

(早稲田大学)

わたしは、二〇一七年に『三国志事典』を出版しました。客観的な事典ではなく、主観的な「事典」と踏み切りをつけ、それまでの自分の三国志研究の成果を事典としてまとめてみたのです。幸い好評を得て版を重ねるうち、『三国志演義』との違いを明確にして欲しいという要望を耳にするようになりました。

『三国志演義』については、敬愛する沈伯俊先生の『三国志演義大辞典』（中華書局、二〇〇七年、譚良嘯先生との共著）があり、その旧版の一部は、立間祥介・岡崎由美・土屋文子（編訳）『三国志演義大事典』（潮出版社、一九九六年）として翻訳もさされていきます。ただ、昨年、沈伯俊先生が道山に帰され、『三国演義大辞典』が、更新されることは無くなりました。

また、仙石知子さんが『毛宗崗批評』『三国志演義』の研究（汲古書院、二〇一七年）という『三国志演義』に関する本格的な研究書を出版しました。これは、それま

での研究が、『三国志演義』の版本をめぐる問題を中心としていたことに対して、『三国志演義』の文学としての内容や表現の分析を行い、そこに反映している中国近世の思想状況を考察した優れた研究書です。こうして、『三国志演義事典』の中核に仙石さんの研究を据えれば、沈伯俊先生の『三国志演義大辞典』とは別の新しさを持った『三国志演義事典』が書けるのではないかと思います。仙石さんに共に執筆いただくことをお願いしました。

したがって、『三国志演義事典』の白眉は、仙石さんが担当した「名場面四十選」にあります。もちろん、事典としての機能を果たすため、人名事典を附し、『三国志演義』と正史『三国志』との違いが、『三国志演義事典』だけでも分かるようにしました。さらに、すでに『三国志事典』をお持ちの方のために、人物の並べ順を『三国志事典』に揃えることで、二つの事典を比べて読んだ際に、『三国志演義』と正史

『三国志』との違いが明確になるよう心がけました。加えて、『三国志演義』のおもしろさを支える戦いの諸相には地図を附し、具体的な動きを整理し、さまざまな謀略も網羅しました。また、『三国志演義』の普及に大きな影響を持った関帝信仰についても一章を割き、その展開を整理しました。『三国志事典』と『三国志演義事典』の二冊をあわせることで、『三国志』の全体像を提供できるようになったと考えております。

## 正史『三国志』のことを知るならこちら！

正史『三国志』に伝のある人物四四〇人全員の解説をはじめ、三国時代の歴史や名場面、文化・宗教など、基本事項を網羅。また、邪馬台国や卑弥呼で知られる「魏志倭人伝」についても解説。索引や年表、資料類も完備。



『三国志事典』  
渡邊義浩 [著]

A5判・上製・388頁  
定価=本体 3,600円+税

◎読み比べることで、新しい魅力が見えてくる

# 『李白と杜甫の事典』

2019年夏  
刊行予定

向嶋成美 [編著]

唐を代表する二大詩人、李白と杜甫の総合事典。250篇を超える詩文の解説を主に、李杜の生涯や旅について紹介する。二人の生きた唐代の歴史や地理、政治や文化についても一章を設け、作品理解のための幅広い情報を提供する。唐詩の形式・助字解説・年譜・地図など、国内外の最新の研究をふまえた資料も充実した一冊。

## 内容紹介

〈主要目次〉

- |                |             |  |
|----------------|-------------|--|
| I              | 李白と杜甫       | 唐を代表する二大詩人の交友とその文学的評価の違いについて解説。  |
| II             | 李白          | 「生涯」「旅」「詩の世界」の3項目から、二大詩人を徹底比較！<br>「詩の世界」では、自然・人生・思索・社会のジャンルごとに約250篇の作品を解説。 |
| III            | 杜甫          |  |
| IV 李白と杜甫を知るために |             |  |
| 1              | 李白と杜甫の時代    | 唐王朝の歴史、政治、地理、文化を項目ごとに詳説。   |
| 2              | 唐詩の形式       | 唐代に確立した近体詩のきまりを概説。   |
| 3              | 文学史の中の李白と杜甫 | 同時代評から後世の評価、日本に与えた影響までを概説。   |
| 4              | 李白と杜甫の諸本    | 国内外の最新の研究動向がわかる貴重な資料も完備。   |
| 5              | 参考文献案内      |  |
| [付録]           |             |  |
| 全作品リスト／年譜／助字解説 |             | その他、研究や課題探究学習に便利な資料が満載！  |
| 詩題索引ほか         |             |  |

# 李白と杜甫を並べるといふこと

## 加固理一郎

(文科大学)

李白と杜甫を並称するのは、現在でこそ普通のことであるが、それは李杜の次の世代の詩人たちに始まる。たとえば中唐の韓愈は、石鼓（表面に秦よりも前の文字である大篆が刻まれている太鼓形の石。唐代に発掘されたと思われる）に刻まれた古代文字の価値を訴えて保存を求め主張を込めた「石鼓の歌」を作った。その冒頭で「張生手に石鼓の文を持し、我に勧めて試みに石鼓の歌を作らしむ。少陵に人無く謫仙死す、才薄くして將た石鼓を奈何せん」という。つまり、このような詩を作るならば、自分よりも杜甫（少陵の人）や李白（謫仙）のほうがふさわしいとする。この韓愈の詩は、杜甫の詩「李潮が八分小篆の歌」に影響を受けたとされる。これは古代の書体を継承する人物を賞賛し、石鼓にも言及する詩である。一方、李白の現存する作品には韓愈の「石鼓の歌」に直接的な影響を与えたとと思われるものはない。

また、晩唐の李商隠は「漫成五章、其の二」で「李杜の操持事ほぼ齊し、三才万象共に端倪す。集仙殿と金鸞殿と、是れ蒼蠅の曙鶏を惑はすべけんや」と、李白と杜甫が優れた詩才によつて朝廷に召し出されたものの小人に阻まれたことを詠じる。李白は金鸞殿で玄宗に謁見し、そして翰林供奉となる。その時に作った「清平調詞」は楊貴妃を貶めたものだと言官の高力士が告げ口したというエピソードは、この李商隠の詩にうまく当てはまる。それに対して杜甫は玄宗に集賢殿（もとの名は集仙殿）での待機を命ぜられたが、結局は李白のように宮廷詩人として活躍する機会は与えられなかった。

つまり、李杜が並称されていても、韓愈の詩では杜を主として李はそれに添えられ、李商隠の詩では李を主として杜がそれに合わせられている。このように、李白と杜甫は一括りにして述べるのが難しい。むしろ、



杜甫 (712-770)



李白 (701-762)

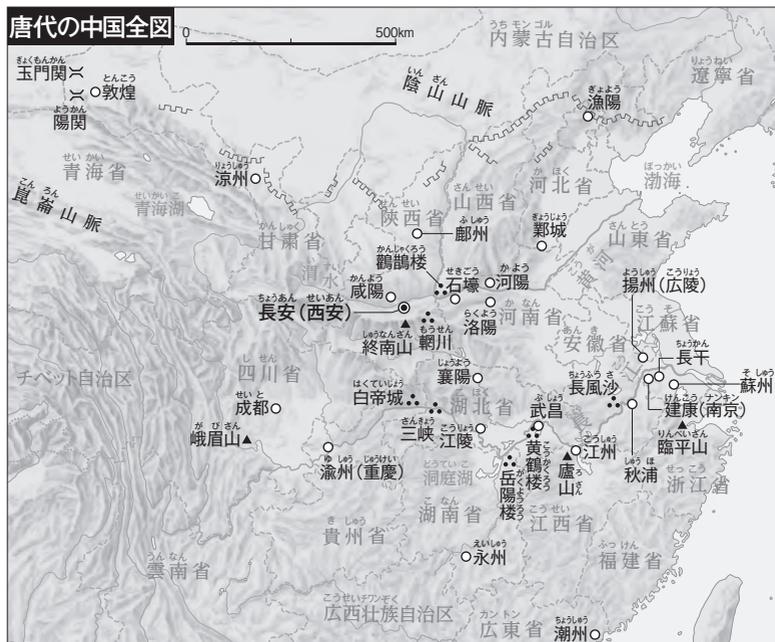




▶右：杜甫「北征」関係図  
▲上：富県附近図



「李白の旅」「杜甫の旅」では、作品の理解に役立つ地図も豊富に収録しています。



## 古典を読みほどく楽しみ——教材としての「長恨歌」

加藤 敏かとう さとし

(千葉大学名誉教授)

中国哲学者加賀栄治氏は国語の学習について「教科学習に

おいて、その本質的なもの・かけがえのないものが、現時点ではともすれば省略と忘却のしうちにあっているように思われる。文章の持つ美しさや思想の深さなど、文を読んで深く考え、じっくり味わわねば、つかみ取ることができないのに、それは手間取ること、めんどうくさいこととして、死角領域に入れられつつあるのではないか。」と述べている。

じっくりと古典のテキストと向き合うと、深い思索の営みや時代を背負う者の情感の表出に触れ、心動かされることもある。また、時には自らの思索の営みを豊かにしたり、時代も空間も超えた出会いの喜びを味わったりすることもある。

### 深窓しんそうの女

「長恨歌」は、最も人口に膾炙した古典の一つである。金沢文庫本をはじめ、わが国に残る重鈔本などの校勘によって、「長恨歌」がかつてどのような本文で読まれていたかが明らか

かになっている。

語彙のレベルでは、例えば第四句「養在深閨人未識」の「深閨」を金沢文庫本他は「深窓」に作り、『源氏物語』若菜上には「深き窓のうちに、何ばかりの事につけてか、かく深き心ありけりとだに知らせたてまつるべき」とあることがよく知られている。一般的な「深閨」ではなく、寺院や閑居の奥まった部屋の窓の意をもち、ほとんど用いられない「深窓」がなぜ選ばれたのか、語感はどうのようなものだったのか。斬新な詩語として受容したのであるうか。興味は尽きない。

「長恨歌」については、同一語の反復、意味上の反復によつて句を連ねることが表現の特徴の一つとして指摘されている。例えば第五七く六〇句「帰来池苑皆依旧、太液芙蓉未（詳註）央柳。芙蓉如面柳如眉、对此如何不淚垂」がそうである。「池」||「太液（池）」、「苑」||「未央（宮）」、「太液芙蓉未央柳。芙蓉如面柳如眉」と、詩想が自然に流れるように展開している。一方、金沢文庫本他は第五九、六〇句を「对此如

何不涙垂、芙蓉如面柳如眉」に作っている。まず芙蓉や柳に対して涙を流すと言い、なぜ涙を流すのかという疑問を喚起させて、その理由を示すという構造である。読者は芙蓉や柳から楊貴妃の姿を漠然と思ひ描く。そこに面と眉が提示され、鮮やかに楊貴妃の面立ちが想起される。どちらが適切か。こうした異同を手がかりとして表現の特色を確認し、読みを深めてゆくこともできるであろう。

「此恨」は誰のもの？

「長恨歌」の結びの二句、一一九〜一二〇句「天長地久有時尽、此恨綿綿無絕期」については、いくつかの読みが示されているが、『源氏物語』をはじめ、白居易（物語世界外の語り手）が楊貴妃を失った玄宗の悲しみを語っている句として読まれるのが普通である。松浦友久氏は、「長恨歌」が「玄宗の心情や行為に即して構成されている」とし、「傷逝」の作品の「恨」は残された者の悲しみであることを論証し、「天上人間会相見」と言う楊貴妃は、解決可能な状況が解決されないことから生じる「怨」を抱いており、楊貴妃を永久に失ってしまった玄宗は、状況の解決が不可能であることから生じる「恨」を抱いているとする説得力のある解釈を提示している。

一方、楊貴妃（物語世界内の語り手）が自らのことを語っ

ている、あるいは玄宗と楊貴妃両者のことを詠じているとする解釈もなされている。それは、仙界の楊貴妃を語る場面が数十句にわたって生き生きと描かれていることや、結びの句と文脈との関係が捉えにくいことによるのであろう。

陳鴻ちんこう「長恨歌伝」に描かれた楊貴妃は、人間世界の愛憎のない世界に存在する仙女であり、方士に旧物（思い出の品）の金釵と鈿合を渡してもその心が乱れることはなかった。しかし、方士に促され、七夕の誓いを思い出したことよって玄宗への恋情が再び生じる。わが国の謡曲「楊貴妃」には「さるにても思ひ出づれば恨みある」とある。生と死を隔てた者の悲しみが生じたと解釈するのである。そして彼女は下界に落とされる運命を受け入れるのである。「長恨歌伝」の楊貴妃は最初から悲しみの中にあつたわけではなかった。一方、「長恨歌」では、楊貴妃は玄宗の使いであると聞いたただけで取り乱し、すでに寂しげに涙にくれている。玄宗に謝した彼女は、「旧物」を贈り、転生して必ず会えるだろうから、金鈿のように堅い心を持ち続けてほしいという願いを託す。彼女の住む蓬萊宮は「虚無縹渺」の空間にあり、永遠の時間がゆつたりと流れている（日月長）、人間世界の愛憎とは隔絶された世界であった。彼女はこの世界で「旧物」を持ち続けていた。玄宗との日々を忘れられず悲嘆にくれていたことを窺わせる。

「長恨歌」には、方士が「旧物」を携え、玄宗に楊貴妃の言葉を告げる場面は描かれていないが、読者は、方士の報告を受けた玄宗が楊貴妃とこの世で二度と会えないという悲嘆を一層深くしたであろう（「長恨歌伝」には「震悼」の語がある）ことを想像する。方士の報告のうちには、「天上人間会相見」（「長恨歌伝」では「結後縁」という彼女の言葉も含まれていたであろう。しかし、たとえ転生して再び会えるとしても、楊貴妃はこの世から永久に失われてしまったのであり、二度と会うことはできないのであるから、彼の悲しみは「恨」なのである。

### 楊貴妃の「恨」

そしてこの構造は楊貴妃にも当てはまる。彼女にとつては、たとえ後縁を結べるにしても、恩愛は失われ（昭陽殿裏恩愛絶）、回復できないものであったのであり、そのことから生じる悲嘆はやはり「恨」であったに相違ない。

「長恨歌」の結びの二句は、一時の寵愛ではなく、永遠の恩愛を結ぶという誓い故に、自らが回復できない悲嘆のうちにあることを訴える楊貴妃の言葉として読むこともできよう。世界を異にし、永遠の時間の流れる仙界にあつても、悲しみは消えることなく、「恨」として天地が尽きようとも永遠に続くものであると、その切々たる心情を最後に玄宗に寄せる

のである。<sup>(注5)</sup> この二句を楊貴妃自らの思いを述べた言葉であるとともに、玄宗の「恨」が重ねられ、語り手自らの感慨が表出されているものとして読むことも不可能ではないであろう。古典が開示するのは、現代における価値や課題解決に資する知見などのみではない。「長恨歌」は魅力あふれる教材であり、「長恨歌伝」や『源氏物語』、謡曲「楊貴妃」他と比べ読みし、味わうことで、豊饒な古典の世界に触れることができる。古典の学習はそのかけがえのない機会である。

〔注1〕 加賀栄治著『中国古典定立史』（汲古書院、二〇一六）「学校図書館は生存に値するか」。

〔注2〕 近藤春雄著『長恨歌・琵琶行の研究』（明治書院、一九八一）など。

〔注3〕 川合康三「長恨歌」について（金谷治編『中国における人間性の探究』、創文社、一九八三）。

〔注4〕 松浦友久「長恨歌」の主題について——「恨」の主体と作者の意図——『白居易研究年報』創刊号、勉誠出版、二〇〇〇。下定雅弘氏は、『長恨歌——楊貴妃の魅力と魔力』（勉誠出版、二〇一一）において、松浦氏の論を踏まえてさらに周到に論証し、「此恨」の解釈を提示している。

〔注5〕 例えば、山崎佳菜「長恨歌」後半部について（『中国文史論叢』五、二〇〇九）。山崎氏は、換韻、「恨」の用例などの検討をふまえてこうした解釈を提示している。

# クエスチョン & アンサー

## 故事成語による導入のしかた

Q 教科書の最初に故事成語が置かれています。生徒の興味をひく導入には、どんなアイデアが考えられますか？

A 平井徹

慶應義塾大学講師

高校一年次の初っぱなに導入教材として扱われる「故事成語」。この時点では、生徒たちに漢文の面白さを感じさせることが何より肝要ですから、後々の学習意欲を左右する、大事な単元と言えます。

故事成語は童話ではなく、その多くが、乱世における政治・外交上の説得術として発展した「寓話」から生まれた事実を、まづしっかりと伝えることが不可欠でしょう。

日本の場合、壇ノ浦でも関ヶ原でも一日で決着がついています。それに引きかえ広大な中国では、戦いはたいてい長期化し、国家に利益をもたらしません。よって、戦争は政治の一手段、外交の延長であり、個々の戦術より大局的戦略眼や外交的な駆け引きが、古来重視されてきたのです。寓話部分の前後も併せ読むことにより、背景を知り理解が深まれば、生徒たちの興味をより喚起させることにつながります。例えば、「漁父之利」の類話として、同じ『戦国策』の中には、「犬兔之争」「田父之功」（斉策）が見出せます。比較してみるのも一案です。

北原白秋作詞・山田耕筰作曲の唱歌「待ちぼうけ」（一九二四年発表）が『韓非子』の儒家批判を意図した「守株」にちなんでいるのは周知のことでしょう。ほとんどの高校生には、とっくになじみのない歌となつていますが、望むらくは、意味が分からずとも、幼時から唱歌に触れ、文語調に接することを通じて、正しい日本語理解の一助としてほしいものです。

「待ちぼうけ 待ちぼうけ／ある日せつせと野良稼ぎ／そこへ兎がとんで出て／ころりころげた木の根っこ」（以下五番まで続く）。恥ずかしながら、ひと節歌ってから、私は「株」字の解について問題を提起します。一般的には「切り株」のイメージですが、陸師成主編『辞彙』という字書には、「木の根っここの地上に出た部分」（「生在土地上面的木根。」）と説明しています。「株」が地表に出た部分、「根」が地中にある部分で、同じカタゴリーの文字というわけですが、白秋の「木の根っこ」という歌詞は、十分妥当性を有する解であると考えます。

時には私も、下手を承知で黒板にウサギと「株」の画を描きますが、予め生徒たちに自由に描かせておいてから説明を加えるというやり方も、初期の段階では有効な指導法かと思えます。

## 二〇一九年度 センター試験 「国語」 漢文の分析と指導

北澤 紘 一  
(代々木ゼミナール)

### 概要と本文の要旨

二〇一九年度センター試験「国語」漢文は、盛唐の詩人・杜甫が叔母の死を悼んで書いた文章からの出題である。杜甫(七一二〜七七〇)は、字は子美、号は少陵野老・杜陵布衣等、「詩聖」と呼ばれ、「詩仙」李白と並ぶ、中国文学史上最高の詩人である。彼の詩文は、日本文化にも多大な影響を与えた。本文の字数は一八五字で、前年度より二字減少したが、センター漢文本文としては標準的な長さ。設問数は七問、マーク数は八個で、設問数は前年度より一問増加したが、マーク数は同じであった。一七年度まで数年間随筆からの出題が続いていたが、一八年度は史伝(歴史書)、本年度は入試漢文の典故としては珍しい追悼文からの出題となった。

本文中杜甫は、まず幼少期に叔母より大恩を受けたエピソードを挙げて、「義」という諡(生前の事績を評価して与える呼び名)をつけたことを明かし、次いで叔母を賢女・魯の義姑になぞらえ、最後に無韻の碑銘で結んでいる。本文冒頭

が読みにくいのが、注を参照すれば大意を取ることができる。設問は、入試漢文として標準的な形式・内容・難易度であり、受験者の学習の成果が成績にあらわれたものと思う。

### 設問の解説

#### 【問1】二重傍線部ア「対」・イ「乃」の意味問題

ア「対」を動詞に用いた場合、「たいス」と読んで「対応する」「対面する」「対陣する」といった意味、「こたフ」と読んで「答える」「お答えする」といった意味がある。「こたフ」は、多くの場合、本文のように「対曰」と直後に「曰」を伴い、目下の者が目上の者の質問に答える際に用いる。本文では、杜甫が「或」の質問に③「こたえて」、幼少期に叔母から受けた恩に報いているのだと述べている。

イ「乃」は、「すなはチ」と読み、「そこで」「やっと」「かえって」「なんと」といった意味を持つ。正答は④「やっと」であるが、①「すぐに」という誤答が多く見られた。「乃」と同じく「すなはチ」と読み、「すぐに」という意味を持つ漢

【問題文】

嗚呼哀哉。有兄子曰甫。制服於斯。紀德於斯。刻石於斯。或曰。豈孝童之猶子與。奚孝義之勤若此。甫泣而對曰。非敢當是也。亦為報也。甫昔臥病於我。諸姑。姑之。子又病。問女巫。巫曰。処楹之東南隅者。吉。姑遂易子之地。以安我。我用是存。而姑之子卒。後乃知之。於走使甫嘗有說。於人客將出。涕感者久之。相与定諡曰義。君子以為魯義姑者。遇暴客於郊。抱其。所携。棄其所抱。以割私愛。果君有焉。是以拳茲一隅。昭彼百行。銘而不韻。蓋情至無文。其詞曰。嗚呼。有唐義姑。京兆杜氏之墓。

〔『杜詩詳註』による〕

字は、「即」「便」等である。一般的に「即」「便」は前後がすんなりつながる際に用いるのに対して、「乃」は前に書かれた内容を条件として、紆余曲折を経て後の内容を導く際に用いる。本文では、杜甫が後年④「やつと」、幼少期病時に叔母がしてくれたことの顛末を使用人から聞いたのである。なお、②「いつも」という意味を持つ漢字には「常」、③「ことごとく」には「尽」「悉」、⑤「くわしく」には「具」等がある。重要漢字の読みだけでなく、意味・用法に対する理解を深めたい。

【問2】傍線部Aから読み取れる筆者の状況を問う問題

傍線部から読み取れる筆者・杜甫の状況を問う設問であるが、導入文と本文傍線部までとが理解できれば解答できる。「奚」は「何」に同じ。ここでは「どうして―か」という疑問を形成している。「孝義」は「孝行」に置き換えてよい。「若」は、「もし」ならば「ごとし」(―のようだ)「なんぢ」(お前)「しく」(及ぶ・匹敵する)等の読み・意味を持つ重要漢字。漢文では「わかシ」(わかい)という読み・意味はない。傍線部のように直後に「此」を伴っていれば、「若レ此」二字で「かくのごとし」と読み、「このようである」「この通りだ」という指示語を作る。傍線部は「どうして孝行につとめることがこの通りなのか」↓「どうしてこんなにも孝行を尽くしているのか」と訳すことができる。①

「杜甫は若いにもかかわらず」③「若い杜甫は」は、傍線部中の「若」を「若い」としており誤り。④は「孝行を尽くしていない」が誤り。⑤は「正義感が強い」「困窮した」が余計である。正解は②「実の母でもない叔母に対し、孝行を尽くしている」。

### 【問3】傍線部Bの理由説明問題

傍線部の直後の「亦、為<sup>レ</sup>報<sup>ル</sup>也」に注目する。「報<sup>ル</sup>」は「お返しする」「仕返しする」という意味、現代語の「報いる」と同じである。導入文に「杜甫は幼少期に、この叔母に育ててもらっていた」とあることから、ここは「育ててくれた叔母に報いる」＝「恩返しする」という意味であることがわかる。これを反映した選択肢は、⑤「自分を養育してくれた叔母に感謝し、その善意に応えているだけだ」しかない。他の選択肢では③に「恩返し」とあり、これが紛らわしいが、「生前の叔母の世話をしていた」が誤りである。

なお「亦」は、直前に送り仮名「モ」を伴うことが多いことから、「モマタ」と覚えられている漢字である。「亦」の基本的な意味は、「やはり」「同様に」。この字に注目して、言葉を補って「亦、為<sup>レ</sup>報<sup>ル</sup>也」を解釈すれば、「叔母が手厚く育ててくれたのと同様に、私も手厚く叔母に孝行を尽くし喪を弔うのである」となる。

### 【問4】傍線部C・白文の書き下し文と解釈との組合せ問題

センター漢文における白文問題の定番は、返り点と書き下し文との組合せであるが、本年度は書き下し文と解釈との組合せである。例年の各選択肢の返り点は、書き下し文に合わせて付けられており、解答には必要がなかった。

傍線部中の「者」は、この字までで一つの句を形成する機能を持つ。白文中に「者」があれば、「―者、〜」とこの字の直後に読点を打つてみて、各選択肢が「者」までを一句に読めているかを確認するとよい。今回は、全選択肢が「―者は吉なり」となっており、「者」で選択肢を絞ることができない。「之」は、「これ」「この」（指示語）「の」（の・ーが）「ゆく」（行く）等の読み・意味を持つ重要漢字。一般的に、指示語の場合は直前に動詞を（動詞＋之、「の」の場合は直前に体言を（体言＋之、「ゆく」の場合は直後に目的地を表す語（之十目的地）を伴うが、今回、この字でも選択肢を絞ることは難しい。②「楹に処りて」（直訳すれば「柱に居て」）が不適切であるが、これ以外、書き下し文部分での判断は受験生には困難であろう。文脈から解釈部分を検討する。傍線部直後に「姑遂<sup>ニ</sup>易<sup>カ</sup>子<sup>ノ</sup>地<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>安<sup>ル</sup>我<sup>ヲ</sup>」（叔母は自分の子の場所を換えて私を安置した）＝「運氣が良い場所に移した」とあるが、柱に関しては何ら手を下してはいない。①「柱を処分する」④「柱を家の東南側に立てる」⑤「柱に手を加えて」は誤り。

正解は③「楹の東南隅に処る者は吉なり」（柱の東南側にいると、運氣がよくなります）。

#### 【問5】傍線部Dの内容説明問題

ポイントは、傍線部「我用<sup>レ</sup>是存<sup>シ</sup>」の指示語「是」の指示内容と、「姑<sup>レ</sup>之子卒<sup>シ</sup>」の「卒」の意味である。「卒」には、「そつ」（兵士・しもべ）「をハル」「をフ」（終わる・終える）「つひに」（結局・とうとう）「にはカニ」（にわかに・不意に）「しゆつス」（死ぬ）等の読み・意味がある。ここは「しゆつス」と読んでいたので、叔母の子は亡くなったのである。②「叔母の子は重病となった」③「病気も治った」④「回復した」は誤り。①「命を落とした」⑤「犠牲になった」に絞ることができる。傍線部直前には「姑遂<sup>ニ</sup>易<sup>ニ</sup>子之地<sup>ヲ</sup>以安<sup>レ</sup>我<sup>ス</sup>」とあり、指示語「是」はここを指している。⑤「叔母が寝場所を移してくれた」が正解。①「女巫のお祓いを受けた」は本文にない。

#### 【問6】傍線部Eの内容説明問題

傍線部「臯君有<sup>レ</sup>焉<sup>カ</sup>」の「焉」は、文末に置かれた場合、「これ」「こゝ」（指示語）と置き字（断定・感嘆等を表す）の用法がある。ここでは「有<sup>レ</sup>焉<sup>カ</sup>」と訓点・振り仮名が付けられており、指示語に読んでいる。傍線部直前に魯の義姑のエピソードが紹介され、「以<sup>テ</sup>割<sup>テ</sup>私愛<sup>ヲ</sup>」と結ばれている。指示語「焉」はここを指している。叔母には「私愛を断つ」という美德があったのである。②「私情を断ち切つて甥の杜甫を救った」が正解。

#### 【問7】傍線部Fの内容説明問題

形式的には傍線部の内容説明問題であるが、本文全体の内容把握を試す意図を含む設問である。「蓋<sup>シ</sup>情至<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>文<sup>シ</sup>」の「文」は、「あや」「文飾」「飾り」という意味である。杜甫は、韻を踏まない銘について、感情が極まれば文飾など施さないと述べている。③「うわべを飾るのではなく、真心のこもったことばを捧げようとした」が正解。誤答⑤が多いが、「あらゆる美点を書きつらねて」が誤り。また、「韻は割愛してできるだけ短く」とあるが、韻を割愛しても文が短くなるわけではない。

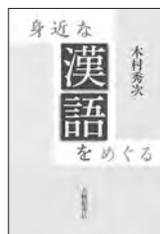
#### 予想と対策

大学入学共通テスト開始を二年後に控え、センター試験から新テストへの橋渡しの間が設けられることも予想されたが、本年度のセンター試験の漢文は、内容・形式ともに従来のセンター試験を踏襲したものであった。来年度および新テストでは、読後感を問うなど傍線部を持たない設問、漢文に由来し現代の言語文化を形成する漢字・語句・定型表現・漢詩・故事成語の正確な知識を求める設問の出題が予想される。傍線部だけを見て選択肢を使って解答するテクニクではなく本文を自力で読解する力や、漢字・語句の読みを覚えるだけではなく用法にまで踏み込んだ正しい理解が必要になる。教員にはより一層高い国語力・漢文力が求められるだろう。

## 木村秀次 著

## 『身近な漢語をめぐる』

四六判・並製二四〇頁・  
本体二二〇〇円＋税 大修館書店



「漢語」は、通常の小型の国語辞典で見出し語の半数に及ぶという。私達の日常生活は「言葉の伝達」によって支えられている。伝達は、話し言葉と書き言葉の両面が存するが、共に「漢字仮名交じり」でなされている。当然漢字・漢語は身近で重要な役割を担うことになる。本書の内容は、I「読みのすがた」II「意味のうごき」III「表現のはたらき」IV「文明とのかかわり」の四部から成る。

I 常用漢字表中の字音語の多さに驚かされる。具体的に字音語を示し、誕生の理由・背景・過程を確かな資料を用いて詳述する。同一の漢語でも、出自・用いられた時代・地域によって読みかたが異なる場合を示す。おとぎ話の「桃太郎」の「おばあさんは川へ洗濯に」の「洗濯」は、全国各地でどのような発音で語りがれているのだろうか、と興味のある提言もある。

II 使用頻度の多い一字の漢語でも、その意味の判断には慎重を要すると説く。「亡命」の命、「泥酔」の泥の意味などは吟味が必要と。共に確かな出自を持つ「遠慮」「我慢」の漢語は、日本で独自の意味の変化が生じた。変化した理由・時代・過程・結果を詳密な資料を用いて丁寧な論究が試みられている。さらに「遠慮」については、日本人の知恵であろうか、読み方のアクセントの使い分けによって、日・中の意味を両立させているという。

III 漢語（漢語的も含む）オノマトペは、同じ語根を重ねる（疊語）型のものが多い。漢字表記と仮名表記のニュアンスの相違を、斎藤茂吉・三好達治・室生犀星の作品を通して綿密に検討されている。「厳かで敬虔なさま」を表す擬態語の「肅肅」が日本で一時期、一部の人々の間で誤用され、本来の意味が失われた。引用には万人共通で正

確な意味の理解が前提条件となる。四字熟語は漢文の四言のリズムを基調とするが、二字の漢語を日本で結び合わせたもの、一部を変更したものなど和製の漢語もかなり多い。たとえを表す複合語について具体的に「柳眉・蛾眉」「蜂起」「蛇行」を示して、分類を試みるなど論究されている。

IV 中国製の「沸騰」は中国ではさまざまな比喩的転義を生じていた。日本の蘭学史料では自然科学上の術語とされ、明治期の化学書に受け継がれ、更に日常生活での「物価の沸騰」「人氣が沸騰」という比喩的用法へと変化した。また、「蒸発」は蘭学者の造語で科学用語である。それがある時期から比喩的に「人が突然いなくなる」意味も表すようになった。そんな理由・意図・転化した時期が判明できる多くの例文が提示されている。読者独自の判断も可能か？

（若林力・元東京成徳短期大学）

## 秋岡英行、垣内智之、加藤千恵 著

〈あじあブックス〉

## 『煉丹術の世界―不老不死への道』

四六判・並製二二六四頁・  
本体一八〇〇円十税 大修館書店

「煉丹術」とは不老不死の薬である「丹」を煉成する方法であり、中国において、不老不死の神仙となることを目指す道教の術として発展したものである。煉丹術は大きく二種類に分けられる。ひとつは鉱物を主原料とした丹薬、特に丹砂（硫化水銀）を熱して抽出した水銀と鉛とを化合させて作り出した丹薬を服用する「外丹」、もうひとつは自分の体内をありありとイメージしながら身体にある陰陽の気を巡らせて丹薬を煉成する「内丹」である。

と、ここでこんな声がかえってきそうだ。「鉱物？ 水銀？ 呑むの？ 危なくない？」「体内で薬を作る？ 気を巡らせて？ 怪しくない？」と。もちろん危ないし怪しいと言えは怪しい。実際、唐代には何人もの皇帝が丹薬の毒に中って死んでいるし、内丹の理論には処女と男の赤ん坊が交わるなんて不謹慎なイメージも出てくる。でも待つ

てほしい。いくら現代の我々の目に非科学的で荒唐無稽な迷信のように見えたとしても、これらが長きに渉り広く信じられてきたということは、当時の人々の目には首尾一貫した論理が見えていたということなのだから。「なぜ彼らはそのように考えたのか」。いったん現代の思考というメガネを外して当時の思考というメガネに替えてみればそこにはきつと新たな風景が見えるはずで、それはまた歴史研究において絶対に必要な態度でもあるのだから。

本書は、世界の道教学を牽引する中堅の研究者三名による煉丹術の解説書である。第一章の「煉丹術入門」では煉丹術の歴史と原理が分かりやすく紹介されており、第二章の「煉丹術の経典を読む」では道教経典の中でもとりわけ難解とされる煉丹術経典の内容が詳細かつ平易な言葉で解説されている。なぜ難解なのかと言えば、これら

煉丹術の多くは秘技であるため、経典の文章は様々な譬喩と韻文によって飾られ「意味するところ」が隠されているからだ。学生時代からの同学である著者らは長年の学習と研究を基礎にさらに七年もの歳月をかけて経典を精読し議論を重ね、その「意味するところ」を読み解いていった。その点で本書は一般の読者にとって読みやすい道教の入門書であると同時に専門家にとっても看過できない新説の宝庫となっている。

また道教のみならず、中国の「気」の思想、陰陽五行論、中国医学や漢方、あるいは東洋の身体論や武術などに興味のある人にとっても、本書は恰好のガイドブックとなってくれるはずである。煉丹術はまさに中国思想の核心とも言える「気」の理論を縦横に駆使して作り上げられたもので、これらの分野と密接に関わってきたものであるのだから。「心臓は火の氣に属し易では離卦に相当する。離卦の中爻の陰を腎臓坎卦の中爻の陽と交合させる」。今これが何のことかチャンパンカンパンでも、本書をひもけばその核心がたちどころに理解できるはずである。

(池平紀子・京都産業大学講師)

## 木之内誠、平石淑子、大久保明男、橋本雄一著 『大連・旅順歴史ガイドマップ』

A5判・上製・二〇八頁・  
本体三〇〇〇円＋税 大修館書店



まず、大連に関する拙文の紹介から。「大連——失われた故郷。こうなる」と郷愁は一層哀切な響きを奏でて不思議はない。加えて、私の場合、故郷の喪失は両親の喪失と重なり合っている。」

これは拙著『大連・桃源台の家——昭和十九〜二十年——』（一九九七年刊）の一節で、大連嶺前小学校同窓会の会報「嶺前」の最終号（第三六号）に転載されたものである。この最終号には「さようなら、嶺前！」と銘打った会員の「一〇〇字メッセージ」があり、一二〇名の会員の「同窓会追悼」のメッセージが載っている。いずれも、心の内なる大連嶺前小学校への惜別の辞である。「大連嶺前小学校」自体は一九四五年の終戦と同時に姿を消した。

この春刊行された本書の「地図編」にはかつての大連の地名、町名、建物等が分かりやすく朱書してある。これはありがたい。

地図上で日本時代の大連散策ができるのだから。私の住んだ桃源台の家も明示され、「解説編」には拙著と私の略歴も記してある。気恥ずかしくなるほどの配慮である。終戦五〇年を期して三年間をかけて『大連だより』以下の『大連三部作』を著した往時に思いを馳せ、しばし感慨に耽った。同時に、拙著が本書の刊行にいくらかでも役立っていることを知って嬉しく感じた。

大連が「失われた故郷」になったのは私一人だけではない。私などは消えゆく大連のほんの最後の数年間を掠っただけで、大連の記憶は小学校一年の時に迎えた終戦とその後のソ連軍政下の二年間の方が鮮明だが、戦時中の生活は『大連だより』にまとめた母の実家宛ての数十通の手紙が詳しく教えてくれる。これらを実際の記憶以上に鮮烈な思い出を私の脳裏に焼き付けてくれた。記憶はしばしばこのような手紙や日記、

写真によって潤色され、いつそう輝きを増す。かくして幼少年期という、至福の黄金時代が現出する。前記の二〇一四年に解散した「大連嶺前小学校同窓会」も大連で幼少期から中学校までを過ごした人々による郷愁の産物以外の何ものでもない。そして、人は美化され脚色された幼少期を持つことによって、その後の人生の彩りを濃くしていくことができるのである。

今や大連を記憶にとどめている人は減少の一途をたどっている。本書、『大連・旅順歴史ガイドマップ』を心底から待ち望んでいた大勢の人々がすでに鬼籍に入ってしまったている。本書はこれから未来を生きる人、「記憶」ではなく「記録」によって大連を知ろうとする人々に捧げられた貴重なガイドブックといえる。設計図を引いたのは帝政ロシアとはいえ、ほぼ自分たち日本人の手で造り上げ、二五万人の日本人が四〇年間暮らした大連、歴史に翻弄された旧満州への玄関口・大連は、これからも大陸の一大沿海都市として発展し続けるだろう。

終わりに、同じ遼東半島の旅順、金州も詳しく紹介されていることを付言しておく。

（岩下壽之・東洋文化研究会会長）

## 横山悠太 著

## 『唐詩和訓——ひらがなで読む名詩100』

四六判・並製二四〇頁・  
 本体二〇〇円＋税 大修館書店



「唐詩和訓」——聞きなれない言葉だが、

その字の通り、唐代の漢詩を和訳したものである。漢詩の和訳なら、井伏鱒二や佐藤春夫の訳詩を思い出すが、横山悠太は、これまでない全く新しい和訳を試みた。それは七七のリズムで、ひらがなで訳すというものである。しかも杜甫、李白、白居易、韓愈の詩から百首を選び、全てひらがな、七七調で訳しているのだから圧巻だ。

漢字ばかりでよくわからない漢詩も、ひらがなで平易に書かれているので、するすると読めてしまう。音読してみると、柔らかい響きが心地よく、耳に優しく響いてくる。その魅力を最もよく表しているのが、白居易の「食筍」だろう。その一節。

紫籜 坼故錦  
 うすむらさきの かわひつべがし

素肌 璧新玉  
 はだつややかな みをまっぶたつ

毎日 遂加餐

ひひのおかずは たげのこづくし

経時 不思肉  
 いましばらくは にくもわすれる

春の筍のみずみずしさと柔らかさが伝わり、春をほおぼる人々の顔が目に浮かぶ。

そこで、学生たちにも「唐詩和訓」に挑戦させたいと思いつき、「食筍」を配って音読させ、この和訓を参考にひらがな、七七調で和訳をつけるよう指示した。漢詩は、『新編国語総合』（大修館書店）の中から選ぶことにした。皆、思い思いに詩を探していたが、すぐに指折り数えて作り始め、かなり集中して取り組み、一〇分弱で全員が作り終えた。その中の一首を紹介しよう。

秋夜寄丘二十二員外 韋応物  
 はるかなともよ

懷君 属秋夜  
 きみをおもはば まさにあきのよ

散步 詠涼天  
 さんぽながらに そらへとうたう

山空 松子落  
 しずかなやまに まつかさはおち

幽人 応未眠  
 きつとあなたも わむれないはず

この作品を書いた学生は、「ここのうつの、好きなんです。楽しかった。またやってみたい」と話していた。今の学生は、小学校の頃から俳句や短歌だけでなく、標語やスローガン作りをとおして、五七調、七七調になじんでいるようだ。漢詩を理解し、それにぴったりの七七の言葉さがす。それはまさに漢語と和語のマリアージュ。漢詩を味わう新しい方法の一つである。

折しも、新学習指導要領の「言語文化」には、「和歌や俳句などを読み、書き換えたり外国語に訳したりすること」という活動例が示されている。「書き換える」とは、漢詩や和歌を短い詩や物語などに作り換えることである。漢詩を学んだあとは、ぜひ一度「唐詩和訓」に挑戦してみてはいかがだろう。思いがけず、楽しく生き生きとした「漢文教室」が生まれるはずだ。

(高草真知子・東京成徳大学人文学部教授)